



震災の現場で考える、歴史的町並みの保全。

Prof. Yukio NISHIMURA
Assistant prof. Tomoko MORI
Assistant prof. Takefumi KUROSE
M1 Sakura KAWATA
M1 Taiga SUNAZUKA

文化財の視点からのネパール地震復興支援

2015年4月25日、ネパール中部ゴルカ地方を震源とするマグニチュード7.8の地震が発生し、首都カトマンズを含む広範な地域で、深刻な人的被害とともに、文化遺産にも大きな被害が生じた。

本プロジェクトでは、文化庁・文化遺産保護国際貢献事業による文化財の視点からの復興支援として、被災地の集落空間及び被災状況調査を行うとともに、再建時の歴史的町並みの整備・保全計画を検討を行った。



調査対象地：世界遺産暫定リスト・コカナ

複数の候補地での現地視察の結果、カトマンズ南西部に位置し、世界遺産暫定リストに登録される農村集落・コカナを対象地とした。これまでネパール様式の伝統的建造物が立ち並び、歴史的な町並みが形成されてきたが、RC造建物の増加や、震災による建物倒壊により、集落全体で歴史的町並みが失われつつある。



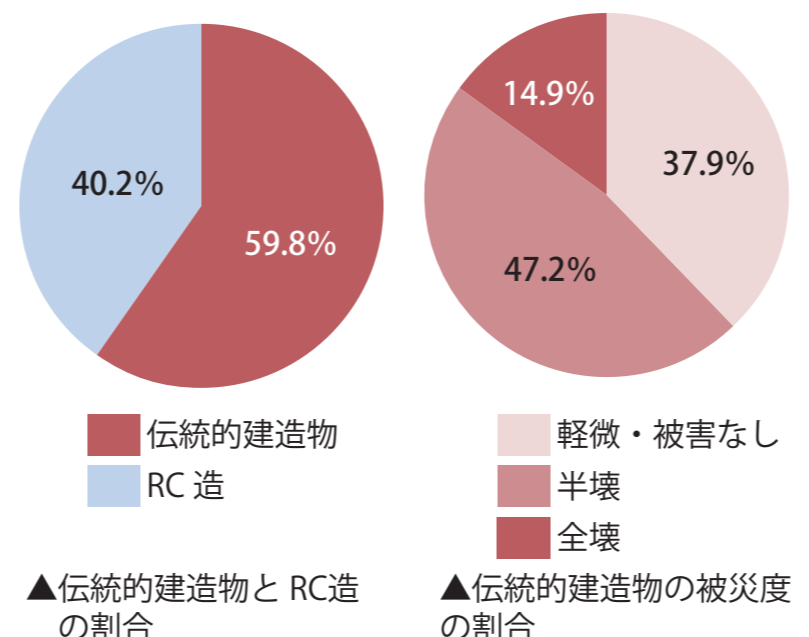
出典1)Niels Gutschow: Newar Towns and Buildings, VGH Wissenschaftsverlag, 1987
2)Gutschow Niels: Architecture of the Newars, A history of buildings typologies and details in Nepal, documentation drawings by Bijay Basukala, Vol.1, the early periods, Serindia Publications, 2011

被災状況の把握と町並み景観調査

主要な街路に面する建物577棟について、工法や被災度合、階数、天井高等を記録するとともに、居住者や周辺住民への聞き取り調査を行った。

被災状況の把握

木材の柱・梁とレンガを用いた伝統的なネパール様式の建造物は約60%が「全壊」もしくは「半壊」に分類された一方で、RC造建造物は約96%の建物が「軽微・被害無し」に分類された。被害の特徴としては、伝統的建造物では連担する建物がまとまって全壊となっている箇所が複数見られることや、RC造建造物では一見被害がないように見えても壁面のクラックや床のたわみなどの建物内部における損傷があること等が指摘された。

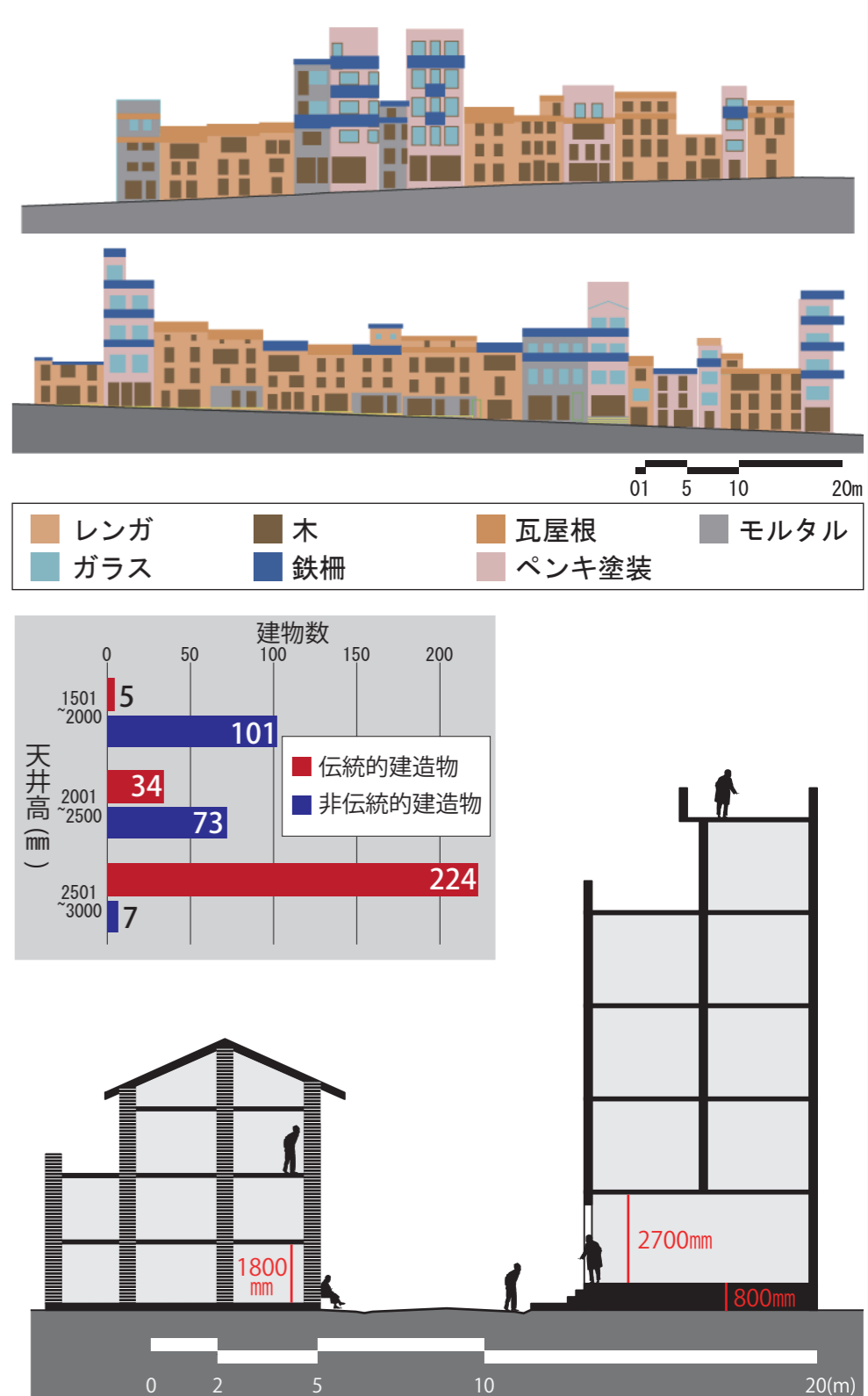


町並み景観調査

中心通りに面した詳細なファサード調査の結果、伝統的建造物が連なる歴史的町並みの中に、RC造建物のペンキ塗装やバルコニー、金属製のガラス窓が現れることで、町並みの連続性が失われつつあることがわかった。

また、基壇高と天井高及び階数の違いにより、伝統的建造物とRC造建物では、建物高さに明らかな相違が生まれ、不連続な町並みが形成される要因となっていることもわかった。

(上) ファサード構成要素の分類図
(中) 一階天井高(伝統・非伝統別)
(下) 街路断面図



整備・保全計画の検討

震災被害を受けた建物の再建に際し、伝統的建造物群及びこれらと一体をなす環境を、保存地区の修理・修景・管理を通じて保存するとともに住民の生活環境向上、近代化に配慮しながら、集落の持つ特性を活かしていくための整備・保全計画の提案を行った。

また、保全計画に合わせ、駐車場の適正配置、歩行者用観光ルートの設定、公有施設活用による観光拠点創出等、将来的な観光開発を視野に入れた観光整備計画の検討を行った。

今後は、このような保全・整備計画に現地住民の方々の意見を取り入れながら、実現性を高めていくことが求められる。



	ZONE 1	ZONE 2
Traditional Building	伝統的建造物については、現状維持を基本とし、被災したものについては、復元に向け、伝統工法を用いた補修を行う。建て替えの際も、伝統工法を持ちこつこととする。	準伝統的建造物は、可能な限り保全する。その他の被災伝統的建造物は、伝統工法を用いて補修することが望ましい。
RC Building	既存のRC造建物は色彩を基本とした修景を行い、建替え時に伝統的建造物への誘導を行う。	デザインガイドラインを策定する。

▲"Historical Settlement"における保存計画の内容

